

文・井上千岳 Chitake Inoue | Photo ● Y.Kawamura

歪みっぽさや刺のない円やかな音調 清冽な流れを思わせるなめらかな感触を 実現したMALCのデビュー作

ベテランのエンジニアが理想の音楽再生を目指し
妥協せずに作り上げたPASIOシリーズのセパレートアンプ

かつてのパイオニアを彷彿させる
シンプルで温かみのあるデザインだ



MALC PASIO C-1/M-2

プリアンプ+パワーアンプ

¥2,420,000+2,640,000
(税別¥2,200,000+2,400,000)

S P E C

[C-1]

最大出力●18Vrms/1kHz
利得●30dB 入力●1系統 出力●1系統
周波数特性●20Hz~20kHz±0.1dB
歪率●0.001%(2V/1kHz)

[M-2]

利得●6dB 入力端子●3系統
出力端子●2系統 出力●110W×2・8Ω
周波数特性●20Hz~20kHz±0dB
残留ノイズ●0.1mV

問い合わせ先●MALC Tel.080-7796-2723

新しいハイエンド・ブランドの登場である。元パイオニアのエンジニアとしてExclusiveブランドなどの開発で知られた佐々木勝弘氏が立ち上げたもので、2チャンネル再生のあるべき姿を追求し、素直な音を目指した製品開発を目的としている。その第一弾としてプリアンプとパワーアンプPASIOシリーズが発売された。Unity Group undingなど独自の思想を具現化したハンドメイド・モデルである。

音楽としての感動や心地よさを求めてたどり着いたユニティグラウンディング

MALC(武蔵野オーディオ・ラボ・コミュニティ)は2019年に

設立された。主宰者の佐々木勝弘氏はパイオニアでExclusiveやZ1シリーズなどフラッグシップ・モデルの開発者と知られたエンジニアで、またその後東北パイニアでは車室の音場解析などに従事している。

こうした経験を重ねた後の成果として開発されたのが、PASIOシリーズである。回路や構成は基本的に忠実なものとしつつ、音楽としての感動や心地よさが目標となっている。そのベースがUnity Group

普通アンプなどのアース（グラウンド）は左右共通で、それが筐体に接続されてアースとなっている。これを左右独立とし、また筐体アースも分離したのがUnity Groundingである。左右の干渉を完全に排除する構想と考えている。また、スピーカーまで含めたコンポーネントの筐体をアースで接続することにより、その電位を統一することも考えられている。

プリアンプC-1は左右独立構成のシングルエンド電圧伝送。ポリリウムには600ΩT型アッテネーターを使用している。また電源はトロードル・トランスを搭載した低ノイズDC電源としている。



試聴ソフト

- ▶『ブラームス:ドイツ・レクイエム』
飯森範親(指揮)、日本センチュリー交響楽団、合唱団他 /
マイスター・ミュージック / MM-4098
- ▶『ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第4番&第10番「ハーブ」』
ウェールズ弦楽四重奏団、フォンテック / FOCD9859
- ▶『ワルトシュタイン 悲愴 熱情』
ーベートーヴェン:ピアノ・ソナタ集ー
外山啓介(pf) / エイバックス / AVCL-84122

両機共にアース端子が装備され、将来的にはDACスピーカーまで視野に入れている

パワーアンプM-2もやはり左右独立のシングルエンド電圧伝送で、出力段にはMOS・FETを採用して110W/8Ω×2の出力を得ている。入力回路はFETを使用したACアンプ構成。電源トランスはトロードル・タイプである。いずれも受注生産で、納期は3カ月となっている。

両機ともアース端子を備え、一般のアースケーブルで接続することもできるが、専用のアースつきケーブルも受注での製作が可能。もちろんアースは接続しなくても通常に動作するが、本来の音質を得るにはアースの接続が望ましいということだ。

透明な艶やかさと粘り 質感を確実に捉えながら ダイナミックに再現

歪みつばさや刺のない円やかな音調で、清冽な流れを思わせるなめらかな感触に富んでいる。力感や繊細感の不自然な強調がなく、音楽エネルギーのナチュラルな出方が印象的。ピアノは厚みのあるタッチが温かめの音色で力強く描き出され、フォルテの和音がふくよかで量感豊かに響く。その強音のどこにも耳を刺すような異物感がなく、タッチの芯はがっしりと捉えながら常に柔らかな

余韻に包まれているのが大きな特質といっている。音色にまったく汚れがなく、どんなに鋭いアタックでもどんなに強靱なフォルテでも、当たりは丸みを帯びて濁りが無い。

室内楽はともすれば先鋭的になりがちな弦楽器の音が、十分にシャープでありながら過度な刺激を感じさせない。歪みがないことの証左で、透明な艶やかさと粘りのある質感を確実に捉えながらダイナミックな再現を展開している。

コーラスは濁りのない純粋な音調で、ハーモニーが柔らかな余韻に包まれて空間に染み渡ってゆくのが見えるようだ。伴奏の弦楽器や木管楽器も手触りがよく柔らかな響きにあふれているが、曖昧にはならない。

オーケストラは各楽器の質感と音色が変質なく引き出されて、アンサンブルにもまったくといいほど濁りが見られない。

トゥッティの強奏はまるで無制限のように鳴り渡る。隅々までエネルギーが行き渡り、頭がつかえた伸びの悪さがないのだ。カンタービレの歌い方も流麗で、ダイナミズムの自在な起伏がもうひとつの特質となっている。純度とエネルギーの見事な饗宴である。今後、フォノアンプもあるので試して見たい。